教祖と一枚のタオル

丁度、私が胃ガンの治療中であることを聞きつけられたある方から御丁寧な見舞い状が一枚のタオルと共に送られてきました。そしてその包みにはお茶と金米糖も入っていて、小さな紙に「教祖からのおさがりです。これは私が修養会でお世話になった御本部の先生からお送り下さったものです。どうぞ召し上がって頂きお使い下さると先生もお喜びになります」と書かれてあった。私はなんと心やさしい真実な方かなと感激しながら赤い字でおやさまと書き記された白いタオルを手にした時、なんとも言えない温みを感じたのであります。しかし、一方存命の教祖がお使い頂いたタオルを使わせて頂いて本当にいいのだろうかと、一瞬戸惑いを感じたのも事実であります。「もったいない、恐れ多くも神様がお使いいただいたものなんだよ」という自問自答からくるものでありました。

処で当時私は抗がん剤治療の真っ最中で吐き気とおう吐、微熱などで眠れない夜が続いていました。ガンが与える影響は大きく、家族だけでなく友人や関係者の方々をまきこんで先の見えない日々のしんどさは想像を絶するもので、布教師を職とする身でありながら、生と死に向き合った時にはさすがに自分の弱さに涙する毎日でした。おつとめをつとめ、おさづけを頂戴し、連日お願いづとめに徹しながらも、一抹の寂しさを覚えるのは信仰の未熟さゆえかと反すうする日々でもありました。
そんな時に頂いた金米糖と一枚のタオル　ー　それは明日の分らない自分にとってどれほど有難いものであったかご想像頂けると思います。その日から毎晩おやさまと書かれたタオルをお腹の上にそっとかけて眠ることを心がけることにしたのです。一枚の布は既にものではなくなり, いつもおやさまと一緒なんだという安心感が体全体に広がっていくように思えたのです。何時の程か安らかに眠れるようになり、その喜びはなんとも例えようのないものであった事を今もはっきりと思い出すのであります。

その日から一枚のタオルは私にとって掛け替えのない命の手綱に代ったような気がしたのはなぜだろうか。私はふと教祖逸話篇６０金米糖の御供の一節を思い出しました。そこには「ここは人間の元々の親里や。そうやから砂糖の御供を渡すのやで。」とあります。神様は神ををやと信じて金米糖のごくをいただいたらよいのや、どんなたすけもしてやろう、心配はいらんと仰っているように感じ取らせて頂いたのであります。きっと先人達は教祖のお心にもたれきって二ふく、三ふくと甘い金米糖を頂かれたに違いありません。今も存命の親を頂くことの有難さを痛感した時、一枚のタオルは単なる布ではなく、そこに親を感じ取ることが出来たのであります。なんともおやさまの理をいただくことの大切さを身にしみて分からせて頂いた尊い瞬間でありました。

今、私は三ヶ月の化学治療を終えて数週過後には胃の手術が予定されています。教祖の温かいお守りを頂いて長いトンネルをようやく通り抜け朝の光が見えたような気がしております。ようぼくとして人を勇気づけ、そして生きる糧となれる喜びは何にも増して素晴らしいことをこの度の一枚のタオルから学ばせて頂きました。大きな節を通して

学ばせて頂いた教訓を胸に、親のありがたさをもっともっと多くの人々にお伝え出来るよう布教活動に専念したいと心はやる昨今です。
今まさにアメリカ伝道庁８０周年記念祭を来年の６月１５日に控え、更には２年後には教祖１３０年祭を迎える又とない時旬にアメリカ、カナダそして新たな世界への布教活動の一旦を担わせて頂ける喜びをかみしめながら進ませて頂きたいと心から願っています。

米国加州ウエストコビナ市在住
中河部属
上杉武夫、７３歳

Takeo Uesugi, 73 years old
Chuka Buzoku
West Covina, CA USA